

はじめに

今年の研究テーマは「鉄道事業に対する投資のあり方」です。

一口に投資のあり方といっても、路線ごとの状況によって適切な投資の方法も異なってきます。そこで今回は、数ある旅客鉄道事業者の中でも営業を行っている地域が広範に及び、それぞれ提供するサービスも地域ごとに異なるJR（貨物を除く）を対象に研究を行いました。JRにおいてこれまで各路線（地域）に行われた投資の中から、周辺の環境の異なるものを取り上げ、分析を行ったつもりです。他の鉄道事業者でもJRの各路線の情勢と近い状態におかれている所は多く、この研究で言及していることを他の鉄道事業者の事例にもあてはめることが出来る部分もあるかと思えます。

今日、JRは「民営」で行われています。つまり最後には国が守ってくれるという国鉄時代との経営とは異なり、民間資本による自ら責任を負わなければならない経営になっているのです。そして国鉄時代においては、主に高度経済成長に伴う需要の増加に対し、供給を追いつかせるために投資が行われてきました。しかし一通りの整備が行われ、ほとんど供給が需要に追いついたといってもよい今日においては、JRはこれまでの利用客を維持しつつも、いかに新たな需要を見出し、対応していくかが重要になってきています。

しかし一方で民営化されたことによって、JRは鉄道事業以外の分野にも大きく進出することが出来るようになりました。国鉄時代には出来なかった、関連事業の拡充を積極的に行うことが可能となったからです。各地にホテルチェーン事業や不動産業を展開したり、また最近では駅という最高の立地を活用した駅構内店舗等が数多く展開してきています。

これに対し本来の事業である鉄道に対しては、様々なサービス改革を行ってきてはいますが、鉄道離れが進んでいると言われていた今日、全体として利用者は伸び悩んでいます。しかしそこで鉄道事業への投資を切り捨て、他事業へ回してしまうというのは早計です。やはり利用者は、JRが「鉄道事業者」であるというイメージを強く持っています。よって、鉄道事業を疎かにしてしまうことは利用者へのイメージダウンに繋がり、さらに利用者を減

小さらせてしまいかねません。鉄道への投資は継続的に行われるべきなのです。

そこで今回の研究では、今後JRが鉄道路線に対しどのような投資を行っていけばよいかということ进行分析し、提言を行っています。一口に鉄道路線に対する投資といっても様々なものがありますが、今回は主に既存の路線のサービスを向上させるための投資について取り上げています。鉄道経営が厳しくなっていく今日において、新たな路線敷設を行うよりも既存の路線をいかに最大限に活用していくかが重要と考えたからです。

第1部では今日の鉄道を取り巻く環境、特に鉄道への投資に直接影響を与える環境の変化について説明しています。

第2部ではJRになってから実際に行われた投資例を5つほどあげて分析、考察を行いました。

第3部では、それまでの話を踏まえた上で、これから鉄道路線に対し、どのような投資を行っていけばよいのかという事について言及を行っています。

簡単に今回の研究の流れについて説明してきましたが、詳細は本文をご覧ください。なお鉄道への投資という話題には様々な要素が伴ってきますが、今回の研究では「JRは民営企業である」と見なし、自助努力でいかに鉄道で利益を上げるかということを重視しています。誠に勝手な判断ではありますが、鉄道建設・運輸施設整備支援機構、いわゆる「鉄建公団」や、近年の山陰本線高速化改良事業で行われた地元民の寄付等の財源補助に関する話題の詳細については取り上げませんでした。

この冊子を通じて、JRの鉄道事業に対する投資のあり方について、読者の皆様に理解や認識を深めていただければ幸いです。